

# 『保育士養成課程等検討会』提出意見書

日本子ども・子育て支援センター連絡協議会

## 1. 子育て支援について

新保育所保育指針の改定を踏まえ、保育現場での実践につなげるために「子ども自身が持つ能力」、「親自身が持つエンパワーメント」に寄り添う**保育士の役割**として、次に掲げる視点を保育士養成課程に取り入れることをご提案します。

保育士としての ①親と子の理解 ②相談技術 ③他機関との連携の視点を提案します

### (1) 支援センター等実習により親子理解を深める視点

親と子と関わりを実際に観ることができる、親の気持ちや考えを直接聴けるには、子育て支援センターでの実習を必須にして頂きたいです。現場に入った時、保育者として親理解が深まると考えます。

### (2) 親子理解と保護者並びに地域の親への「支援の芽（目）」を持つ視点

保育所の持つ人的資源、園庭等物的環境の資源の提供に留まらず、園児の生活・遊び、子ども同士の関わりなどが、保護者の「支援の芽（目）」となります。

親理解を深めると共に親同士が協同して子どもの育ちを培う働きを支援する視点が必要だと考えます。

### (3) 相談技術の視点

子育て支援には、親理解、コミュニケーション能力、相談援助力と子どもの発達の熟知が必要です。それらを強化することを望みます。

実際の相談では、子どもの成長発達を理解し、その発達過程に応じた対応や技術が必要となります。親自身が持つエンパワーメントに寄り添い、親同士が自己解決していくことを見守れる力等の視点を取り入れて頂きたいです。

また配慮の必要な児童に対する理解、児童の家族への理解、さらに妊娠から出産後の心身の安定を図るため、親の心身に対する理解が必要となります。

### (4) 他の専門機関との連携の視点

子育て支援には、ソーシャルワークを基礎に、多機関との連携の知識と援助技術を習得する必要があります。

## 2. 保育内容について

### (1) 「0歳からの生活」「0歳からのコミュニケーション」 生活科目の履修

生活科目を養成課程に組み込み、履修修得するべきものと考えます。

保育士を志す者であっても、彼等自身の生活体験・経験の不足は否めません。子どもとともに生活を営むことは

更に過剰な要求となっています。

子どもは被養育者であるとともに、家族の一員として立派な構成員であり、役割を果たし生活の主体者として日々生活をしています。

倉橋惣三は言っています。本義的家庭教育（家庭生活それ自体の裡に自然に存する教育）というように、その生活動作に心身の成長発達を促す機能がある。また、保育所等における方法的家庭教育（家庭において我が子のために計画的に実行する教育）においても、多様な生活体験を経験させることが成長発達を保障することにつながる。日々の生活において「人間観察力が育ち、同情や共感を知り、様々な事柄に対する対処法を知り、社会を生きていく上での能力や胆力が育つ」ものであり、人間関係及び関わりにおいてコミュニケーション能力を育み、非認知的スキルを育む機能が存在している。「家庭生活の教育性」（倉橋惣三）

## **(2) 「0歳からの運動」 0歳～3歳未満児の運動科目の履修**

「0歳からの運動」を保育士の養成課程に組み込み、履修修得すべきものと考えます。

身体・運動能力等の発達を育むために最も重要な時期である乳幼児期の未満児の運動が十分に実施されていない現状であります。

0歳から幼児期・少年期へと成長発達する連続的な発達として捉える必要があるが、0歳から3歳未満時期における運動の指針となるものがなく、かつ養成課程において十分な理解と技能習得がないことが現場での実践に影響を与えていると思われまます。

新保育所保育指針においては、乳児保育（2）ねらい及び内容（イ）②「一人一人の発育に応じて、はう、立つ、歩くなど十分に体を動かす」（ウ）①「寝がえり、お座り、はいはい、つかまり立ち、伝い歩きなど、発育に応じて、遊びの中で体を動かす機会を十分に確保し～」と記述されています。

1歳以上3歳未満児の保育（2）ねらい及び内容（ア）「自分から体を動かすことを楽しむ。」②「自分の身体を十分に動かし、様々な動きをしようとする」（イ）内容③「走る、跳ぶ、登る、押す、引っ張るなど全身を使う遊びを楽しむ」とされています。

文部科学省「幼児期運動指針」で、幼児期の運動ガイドラインが策定されています。

同指針が対象とする年齢は3歳以降であり、0歳及び1.2歳の乳幼児の運動に関する記載はありません。

## **(3) 「0歳からの健康」 小児口腔育成の考え方と取り組みの科目の履修**

口腔育成の考え方と取り組みについて保育士の養成課程に組み込み、履修修得すべきものと考えます。

小児保健科目において口腔関連の記述は「乳歯」「虫歯」「予防・衛生」といった内容になっています。一方、歯科医の間では、虫歯は減少していますが、子どもの口腔の発育不全が問題視されています。口腔育成は、家庭及び保育所等において0歳から始まり乳歯期に取り組む課題であります。（参考資料 別添1）